

---

# ヒナゲシの華

水無月奎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒナゲシの華

### 【Nコード】

N5189Z

### 【作者名】

水無月奎

### 【あらすじ】

似た名前でありながら、厚遇されるヒナコと冷遇される主人公ヒナゲシ。同じ年の従姉妹でありながら、周囲からの愛され度は主役とモブキャラ並の格差があった。

だが、異なる世界に飛んだ時。ヒナゲシはヒナコの影から躍り出る。

【話の傾向は、女平凡主人公が異世界トリップで逆転人生な逆ハーレム、シリアスダークになりきれないコメディ文体で乙女ゲー指向のご都合主義】

一話自体は短め、読み易いがかつつり読み込む方には物足りない恐れあり。

恋愛面はNLGLBLがギャグシリアス混在で絡んでくる予定。注意喚起しますので、ご安心を。

似て非なるヒナ（前書き）

さてさて、物語の始まり始まり。

## 似て非なるヒナ

悲劇は、外から見ると喜劇に見えることがある。

対岸の火事であれば、何事もなく平和に滞りなく進むストーリーより、キャストが四苦八苦していることこそが面白い。

その苦悩する様が、涙する顔が、激昂するのが嬉しいのだと。他人とは得てしてそんなものなのだ。

などと悟りきった冒頭を語る私、名をヒナゲシという。漢字は雛粟粟なのだが、素直にこれが書けるだろうか。いや、書けまい。

というわけで、だーれも漢字を思い浮かべて私の名を呼ばないため、ヒナゲシなのだ。

そんなヒナゲシさんが、何人生悟りきっちゃった枯れた台詞咳いてんの、ってな話だが、今現在悲劇真っ只中だからである。他人には面白くて仕方ない類いの。

ヒナゲシは農耕して生計を立てているちっちゃな村の小娘なのだが、まるつきり同い年の従姉妹がいる。名をヒナコ。

この村で年齢がぴったり同じなのは二人だけ。2と3離れた上と下の娘さんもいるが、十三なのは二人だけ。

親も姉妹とくるから、何かと比較されて生きている。

その比較こそが悲劇。他人から見れば喜劇。ちくしょう、運命を呪いたい。

ヒナコとヒナゲシ、という響きは似ているのだが、顔面とスタイルと漢字まで『似て非なるもの』、という言葉がピッタリと当てはまる。

上に見られる側はいい。くより可愛いね、くより似合うね、くよ

り好きだなあって褒められフィーバーだ。

が、下に見られる方からしてみたら。くより可愛くない、くと同じように出来ないの？、くだったら良かったのに、と。まるで存在するのが悪かのように言われまくる人生をひっ被らされるのだ。

詰んでる。人生詰んでるよね。この先の人生全て見えた気分だ。

これが母の語る物語ならば、こんな器量悪しの娘にも一途に想ってくれる男というものが存在するわけだが。

人生、そんなに都合良くはいかない。現実はいつだってシビアだ。初恋以降全ての恋心を踏みにじられ続けた私は、既に悟りきっている。まともな恋愛はもう諦めよう、と。

きつといつかあぶれた男性と見合い婚だ。それも嫌がられるなら、一生独り。あつ、泣いてないから。これ、ただの汗だから。

大人たちの心ない言葉はもうグッサグサとヒナゲシの心を突き刺している。その上で成り立った性格だ。もう清い心のあの頃には戻れない。人生、諦めが肝心である。

どんな台詞にもめげない鉄の心。傷ついた表情など、周りを喜ばせるだけ。そういうわけで、今のヒナゲシは完成している。親も遠い目をする、時々。

「ヒナちゃん！」

いかにも女の子らしい、甲高い声が響く。村を見下ろせる位置で突っ立っていた私は、顔を上げた。

「ヒナコ」

無垢な笑顔全開で走り寄ってきたのは、話題のヒナコさんだった。遠目から見ても可愛い。軽く死にたくなかった。

「もう、ヒナちゃんったら！　すぐに居なくなるの良くないよ！」

いや、お前こそ何故にすぐ真横に並びたがるのか。おかげさんで比較しやすく、ますます私は悪し様に言われるのである。

そんな事よりも。

ヒナコの背後に目を移し、うんざりとした。また増えている。

「後ろの男ども、また増えてんじゃん。何で連れてくるかな……」

十三ではあるが、十分女の子らしい可愛さがあるヒナコは、村中の男をもれなく骨抜きにした。その射程範囲は十代に留まらず、二十代三十代にも及ぶ。ロリコン野郎が多過ぎて死にたくなる。

逆ハーレムというものらしい。縁のない言葉だったが、ヒナコが身近にいることで、嫌でも野郎どもの醜い争いを間近で見続けるはめになった。

「それにヒナって呼ぶのやめて。それ、あんたのことだから。むしろ村中の共通認識だから」

それをあえて私に使うのだから、嫌がらせなのかと言いたくなる。あつちのヒナちゃんも可愛いけど、こつちのヒナちゃんは、ねえ……？　なんて大人たちに言われてみやがれ。確実に何かが減るぞ。

「いいじゃない、ヒナちゃんと私しか、ヒナっていいんだよ」

うん、貴様が考えなしなのはわかった。ありがとう、君の無邪気でより一層傷つけられてます私。

背後に並ぶロリコンどものうっとり顔も吐き気に繋がる。私の体調不良は貴様らのせいだ。死ねよほんと。

「ねえヒナちゃん、今度の収穫祭で歌と踊りを披露するの」

「ぜってえー嫌だ」

「まだ言い切つてないのに」

何が言いたいのかは瞬時に把握した。

この幼馴染は、本気で理解してないのかと突き詰めたくなるほど、私を同じ舞台に立たそうとする。それがどんな悲劇を引き起こすか知らないで。

歌と踊り？ こいつと一緒にやってみやがれ。ますます格差社会が生まれるじゃないの。主に私とヒナコの間。

何でお前いんの？ と怪訝な視線を集める晴れの舞台での羞恥プレイは一度で十分だ。そこに思い至らなかつた過去の自分も抹殺してしまいたい。

ヒナコとヒナゲシさん。二人一緒に赴けば、お呼びでないと叫びたげな怪訝な顔をされる辛さがご理解いただけるだろうか。

何でここに居るの？ 何で？

これほど人を傷つける視線があるだろうか。奴らは覚えてなからうが、私は過去の一つ一つ覚えていく。簡単に許せるわけがない。とどのつまりは孤立してるってことなんだけど。死にたいです。

「ヒナコが一人で歌って踊ればいい。どうせみんなが見たいのはヒナコ一人なんだから」

ざあ、と気持ちの良い風が吹き、目を細める。ここで居眠りしたらさぞかし気持ちが良いだろうが、そろそろ夕飯の支度がある。

「じゃーね」

求められるヒナコと求められないヒナゲシ。  
求められない存在は、どこへ行けば良いのでしょっかね???

## ロンドンと西ゴナ（前書き）

トラウマは一つに非ず。

## ロリコンと画ヒナ

「ロリコンが多くて死にたくなる」

初めてこの言葉を口にしたのはいつの頃だったか。

私自身のことではない。何故なら私の横には大抵ヒナコという光り輝く可愛子ちゃんがいて、存在そのものを霞ませられてきたからだ。うん、泣いてないったら。

自我が芽生える前から、衆目は私でなく私の横に何故かいるヒナコに注目していた。自覚した後は絶望という名の暗闇へおむすびころりんだったが、性別オスの眼差しは総毛立つほど気色が悪かった。

なんでアンタは平気なんだ。

常に情欲にまみれて見つめられているはずのヒナコが反応せず、向けられてはいない眼差しに私がびびっている。まるで自意識過剰で男を見ているようで、私のテンションただ下がりです。

私の存在に気づかず、男どもが話していることがあった。

「あああー……ヒナコたんては体そのものが甘い饅頭みてえええ。萌ゆる」

「すっべすべの白い背中や太ももがな！ 汚れのないおれの天使たん……いやもうおれの嫁！！」

「断固阻止。ヒナコたんはもれの嫁。清いムスメでありすべてを包み込む母であり淫らなこいびちよ」

ぞわわわわわ。

頭が太もも辺りにきてしまう大の大人たちが、ハアハアと息も荒くマシンガントークを繰り返していった。

気づけよ。てめえらの足もとにいるいたいけな子供によおおおおおう！

貧血状態に陥った私は、吐いた。大きな栗の木の下で。

村に住む大人たちが、一事が万事、こんな調子だったもので、すっかり好意を寄せた人物の本性を知るたび吐いた。

ダメだ。何かもうこの村超ダメだ。

まともな大人がいない。フーか妻帯者もこんな調子。まともな発言してる野郎も裏ではハアハア逝ってた。

怖い。怖い怖い怖い。普通な大人って実はいないんじゃない？

この世の人間すべて、ヒナコを認め求める人間しかなくて、ヒナゲシを求めてくれる人はいないんじゃない？

げろげろと胃の内容物ぜんぶ吐き出した後に、残ったのは厳然とした事実。私にはありがたくない現実。

まだ子供と言って相違ないヒナコ。この先成長すればどんなことになるんだろうか。そしてその時も私は彼女の横に並んでいるのだろうか。同じ名前なのにね、と言われながら。何の罰ゲーム？

ヒナちゃん。ヒナちゃん。

最近では幻聴に怯えるようになった。

近くにいない筈の声が聞こえるんですが、これはあれでしょうか、心の風邪とか何とかいうアレ？ 戦士とも勇者とも呼ばれる企業戦士たちが人間関係に悩みながらレベルアップして得る職業病？あれ、私思ってたより追い詰められてる?? まだ十三なんだけど。

最近では逆ハーレムも大規模になってきた。つまりいつでもハフしてオスどもを引き連れて参上する。私の胃がねじ切れる日も近い。

「ロリコンが多くて死にたくなる」

ぼつりと零した本音は切実だ。

頼む、少女ボディに「ツアー！」しない大人がいる世界に私を連れて行って。

リアルはきついろ byヒナゲシ(前書き)

二人並んでても空気。エア存在。

リアルはきついよ byヒナゲシ

春の妖精さんともてはやされている。

夏になれば大空を舞う小鳥さん、秋になるとたわわに実る木の実、冬になれば誰にも心を溶かせない冬の女王の寵児と呼ばれる。一年通して人外かよ。

もち、私のことではない。

隣にいるヒナコちゃんことである。

私自身は怒涛のごとく浴びせかけられる褒め言葉の流れ弾を受け、魂が口から飛び出ている。

無理。自分が褒められるならまだしも、私なんか全く見えてない人たちの言葉は凶器だ。

しかも妖精とか天使とか。人間やめさせてどうするつもりだ。そしてこんな言葉の暴力に何故にお前はご満悦なんだ。

懲りずに人外の隣に立つお前はバカかと思われた皆さま。150cmちよいしかない私たちを取り囲むこの壁が見えてますか？ 私の頭の上に胸部がありますよね？ そんな彼らが円陣を組んでいますよね？ ね？

もちろん注目は隣のヒナコちゃんだ。収穫祭のために彼女の母が精魂込めて縫い上げた一張羅を着て、貢ぐことに余念のない男たちの怨念のこもったアクセサリーを散りばめた彼女しか見ていない。それ以外に見るものなんぞない。ここには。アタシトカナー！

だが。私は彼女と従姉妹なのだよ。同い年のオンナノコなのだよ。

片一方だけが着飾ってるわけがないんだよね。親が姉妹ですしね。たとえ片一方の母親があんまり裁縫得意じゃなくて、娘を飾り付けるプラスチックなアクセサリーを忘れててもね。同じ意味で着飾ってるんだから、並べられる。当然のように。

「ハアハア。萌ゆる。ちょー萌ゆる。何あのスカート丈。何この襟ぐり。ちょ、おま。髪をかき上げるたび薫るフローラル。買う。絶対同じシャンプー買う。そんで同棲ごっこしちゃう。むほっ！」

初恋のお兄ちゃんが何か言ってる。

うん、意味なんか考えちゃイケない。今にも逝きそうな男がそこに居るからな。ここで倒れてこいつらに触られるなんて願い下げだ！

顔面蒼白で今にもリバーズしそうに汗かいてる私なぞ、誰一人として気づいちゃいない。か、悲しくなんてないんだからっ！

「ヒナちゃん、みんな喜んでくれて良かったね！今年も二人で歌おうね！」

『え……』

聴こえない筈の音が空気を伝って私の耳に飛び込んできた。

え、なに、お前も歌うの？一緒に？天使の歌声に雑音混ぜてどうすんだよ。

という、何とも痛い本音が。KYヒナコ、デスノート決定。

「ヒナコ、みんなアンタの歌声が聴きたいみたいだよ。一曲歌ってやったら？」

そして死ぬ。あつ、違つた、ここから出せ。

「ええー……ヒナちゃんの歌声とっても可愛いのに」

むくれたヒナコは妖精だろうか天使だろうか？ もういつそ女王様でいいんじゃない？ 誰もが君に傳く。

「私は老害、アツイイマチガエタ、村長んとこ行って来るから。ヒナコは歌つてて」

永遠に。そして私に二度と話しかけんな。

速やかにその場から姿を消すという悲しいスキルだけは得ていたので、いつもより華やかになったヒナコに群がる男の群れから抜け出せた。

振り返る。うん、誰も追って来てない。当然なんだけど、悲しいね！ 空気ダネー！

収穫祭用の一張羅。が、見てもらえなければ無用の長物。虚しいけれど事実です。

自宅でパパツと着替えよう、そうしよう。それで賑やかましい村の様子とは一線を画して自分の世界にこもろう。うん、私の正義は二次元の中。いいよな、ご都合主義。イコール、ヒナコ不在！

何気にオタクをカミングアウトしてしまいました。すみません、腐女子です。現実に耐えられなくて厚みのほとんどない彼らがマイダーリンです。

ノマカブとかやおいとか百合百合とか普通に口から出ます。いいよな、二次元……。

収穫祭に家に閉じこもるバカがどこにいる、ここにいる、ヒヤッ  
ハ！ てなわけで誰も見やしねえ一張羅を脱ぎ捨てる。代わりに  
着替えるのはゆるゆるになった襟元かつ洗いすぎてめっきり生地が  
薄くなった古着だが、どんな辛い乙女ゲーも脱出できないRPGも  
乗り越えた戦友でもある。不満などあるうか。

「さてっ、ヒナコのいない世界に逝くか！」

この日にこそ相応しいと取り置いていた物語がある。自分を投影  
できる女の子が、平々凡々な日常から飛び出して、いきなり異世界  
にトリップしちゃうアレである。何でも鉄板と言われるほど萌える  
展開まみれらしい。

リアルじゃない友達から聞いた話だと、あなたは勇者だ！ と選  
ばれた者として王族や神様にチヤホヤされる展開だとか。何それ、  
うらやましますぎる。私なんて生まれてこの方厚遇された記憶がない。  
死ねヒナコ。

要約すれば召還された世界で、王子やら王様やら宰相やら神官や  
ら冒険者やら魔法使いと恋愛したり憎まれたりそれはそれは色々多  
種多様な人間関係に恵まれるとか。な、何それ、私これまでスルー  
されてばかりで自分の名前呼ばれることすら碌になかったよ！ さ  
すが物語、ヒロインに優しい。

そうか……私でも友達を作れたり恋人を作れたりするのか。  
涙がこみ上げてきた。他にも色々こみ上げてくるものがある。ど  
んだけヒナコの陰に隠れた人生だったかが染みた。ちょー染みた。

「えーっと、食料に飲料水に書くもの？」

非リアル友達様のメッセを読み上げながら、部屋にこもる下準備



この世界はフィクションです。(前書き)

到着。けれど肉椅子に。

この世界はフィクションです。

完全に不意打ちであった。

一から丁寧に教えてくれる非リアル友人様に尻尾を振りすぎてしまったらしい。

異世界に飛び立っているのか、束の間の暗闇の中で、めまぐるしくヒナゲシは考えていた。

信じすぎてバカを見たのは一度ではない。けど外なら、村以外の人ならあるいはと考えていた。

バカ過ぎる、ヒナゲシ。この世は私の為にあるのではないと知っていた筈なのに。

違う世界に向かいながら、強く強く自分を戒め直し、そうしてヒナゲシは扉を潜った。

ひゅぽんっ。

と何だかとても気の抜ける音がして、体に衝撃が走る。言うならば不安定だった態勢がようやく安定した、みたいなの。

そうつと片目を開け、異世界とやらを観察する。

目の前にオッサンがいた。

「あれ？」

てつきり厳かなる神殿とやらで、大勢の前で召喚されているものと思っていた私は、目の前でワイディングラス片手にポカンとしているオッサンに、ポカン返しをした。

胸元をくつろげたシャツに、ワイングラス。何だかとてもリラックスタイムだ。

「えっ？」

ガン見されているので居心地が悪く、身じろぎしたらビクリと椅子が揺れた。

待て待て待て。

椅子って揺れる？ しかもビクツと生きてるみたいに。

そろそろと首を動かし、背後を見上げ　　っぎゃあああああ！

人間椅子。

私はどうやら人さまのお膝の上に乗っかっていたらしい。  
それも綺麗な綺麗な銀髪のオニーサンに。

「……」  
「……」  
「……」

お願い、誰か何か言って。

その足から降りるとか降りるとか降りるとか。

驚愕に目を見開く私とオッサンと銀髪美形。

時が止まった。

かといって良い歳をしているお兄さんに、いつまでも乗っかっていて良いものだろうか？ いや、良い筈がない。

そうっと尻をズラす。  
そうっと、そうっと。

そうして体が落ちると思われた瞬間、ホールドされた。

「っ危ない！」

「わああっ」

どうやら私が自覚なしにその身が落ちると思われたらしい。長い腕が、ボディに絡まる。

更に、沈黙。

オッサンはやっぱりワイングラスを持っていて、私は囚われていて、人間椅子は私を戒めたままで。

何これ、どんな展開？ 私勇者設定じゃないの？？

混乱も極み。

私は泣いた。

その涙、プライスレス（前書き）

泣きなさい、笑いなさい。

## その涙、プライスレス

だばだーっと涙を流す私に、ポカンとこちらを見ていたオッサンが慌てたように誰かの名を叫ぶ。

「り、リーゼシアっ！」

上擦った声にすぐさま部屋の扉が開いた。意匠の凝ったそれは両開きになっていて、一人の女性が足早に近づいてくる。

目が素早く金髪のオッサン、今は肉椅子となっている銀髪美形、そして壊れた蛇口化したヒナゲシを確認する。私を見た瞬間、驚いたように目が瞪られたが、それも歪んだ視界の向こうでのことだ。詳細は知らない。

「な、何だ？ どこか痛いのか？ 腹が減ったか？ これは 酒だからダメか、ええと、水？ ミルク？ リーゼシア、子供は何を飲む？」

「すまない、座り心地が悪いのだろうか？ 俺も椅子になった経験は浅くて 待て、出来るだけ椅子になりきる、だから泣き止んでくれ」

ポトポトと涙を垂れ流す私に、立派な大人二人が狼狽している。それを見て取り、ヒナゲシは泣きながら呆気に取られている。

だって、泣いているのはヒナコでなく、私なのだ。

二人が泣いていれば大人たちはヒナコを取り囲み、気がつけば輪の中から弾き飛ばされていた。

悲しいが事実であり、ヒナゲシの歴史そのまんまである。

もはや何で泣いてるのかもわからなくなった頃、ヒナゲシはかつ

てないほどの高待遇を受けていた。

オッサンが呼びつけたリーゼシアという女性に優しく宥められ、涙を拭われる。

オッサンが机に並べられた飲み物の説明をしながら、どれが飲みたい？ どれでも選べと選択肢を委ねてくれる。

銀髪美形はヒナゲシを己の膝から転がり落とすこともなく、尻が安定するよう横抱きに乗せてくれた。いや別に肉椅子じゃなければどうしても嫌！ ってわけじゃないんですけど。私そこまで図々しくはないんですけど。

何これ、何なの？ これが勇者特典つてやつ??

小さな村で生きてきて、ここまで自分に關心を示されたことはない。あまつさえ、自分の涙の理由と精神状態を心配されるなんて。

異世界トリップ凄過ぎる!!

流れていた涙は途中から感涙になった。心中では「ありがとうございます、ありがとうございます！」と選挙演説者のように感謝を叫んでる。口からも出したが、何が何だかわからなくなったように、大人たちはただ優しく頭や肩や背中を撫でてくれていた。

目が、優しい。手のひらが、温かい。

何より、その意識はヒナゲシに向けられていた。

う、あ、うお、うおおおおん!!!!!!

昨夜は妙齡の女性と寝ました。(前書き)

人と目が合う。嬉しい。

昨夜は妙齡の女性と寝ました。

十三にして泣き喚くとか超恥ずかしい。

けれど生まれて初めて『ヒナゲシ』を見てくれたのが嬉しくて、それどころか私の涙で感情を揺らせてくれるなんて天使としか思えなくて、理性がハジけ飛んだ。

おいおいと泣いた私は気がつけば銀髪美形にお姫様抱っこされてベッドインさせられていた。もちろん銀髪美形ではなく、リーゼシアさんという女性のものだったのだが。

グスグス涙の止まらないヒナゲシを優しく抱きしめ、一緒に眠りについてくれた。

泣きすぎて前後不覚に陥るように意識を落とし、目覚めるとお湯で絞った布で顔を丁寧に拭ってくれる。

羞恥心で死にたくなっているヒナゲシに無体を強いることも一切なく、優しく手を引かれて食卓に連れて行かれた。何故か昨日会ったオッサンと肉椅子が居たが。

そして、ハイ、今ここね。

今現在、何故か銀髪美形のお膝に乗って朝ごはんを食べております……よ……。

いたたまれない、と顔面に貼りつけて懸命に逃れようとしているのだが、昨日目の前で幼子のように泣き叫んだことが念頭にあるのか、まるであやすように朝食を食べさせようとするのだ。オッサンと一緒に。

「まずはスープで喉を潤してからパンを食べるか？ それとも先に

飲み物を口にするか。何がいい？ 昨日はミルクを好んで飲んでい  
たな。果実を絞ったものも幾つか用意させたぞ」

テーブルに並ぶ食器は多い。一斤どころじゃないパンが複数種と、  
スープの入った皿の下にまた皿が敷いてあるし、サラダにつけるら  
しきドレッシングも複数あるようだ。

卵の下にある肉はベーコンやハムより厚みがあつて、何かわから  
ない。そこは異世界らしさだろうか。

物珍しさからじつと食卓を眺めてしまったが、お腹が空いている  
とでも思われたか。

オッサンが自分の好みか子供向けか不明のジャムを伸ばしてパン  
を寄越した。銀髪美形に。

おい……。

勇者特典なのか、また泣かれてはたまらないと思われているのか、  
実際年齢より低く見積もられているのか、ヒナゲシに羞恥プレイを  
要求する。

一晩一緒に過ごしてしまったリーゼシアさんはニコニコと見守っ  
ている。助けは期待できない。

基本、ヒナコが傍らにいたことで、注目を浴びない生活を送り続  
けていたヒナゲシには刺激が強い。

どうして自分は男性のお膝で食事をしているのか。いちいち食べ  
るものをリザーブされているのか。口元が汚れるとすかさず拭われ  
るのか。さっぱわからん。

私は幼児ではないのだから。

困惑顔で銀髪美形を見上げると、前髪を撫でられた。違う！

ねえリーゼシアさん、と救いを求める目で見つめると、おかわりです。ねとミルクを注がれた。違う！

ちよっとオツサン、と金髪に呼びかけると「何で自分だけ」といじけられた。ついうっかり！

口を閉じれば喉をくすぐるように撫でてくる。ペットか！

大事に大事にされることに慣れなくて、子供みたいにお世話されるのが恥ずかしくて、ヒナコではなくヒナゲシを見てくれるのが嬉しくて、やっぱり涙目になるのであった。まる。

**勇者のアイデンティティー（前書き）**

何か仕事下さい。

## 勇者のアイデンティティ

涙ぐんでいる状態がデフォルト化しそうなので、慌ててヒナコを思い浮かべた。

整った顔の作りに、理想的な等身。疚しさの欠片もない笑顔に、周りに集まる村人。その輪に入れたい、入ってはいけないヒナゲシ

一気にナーバスになった。ごめん、生きてマジごめん。オウフ。

浮ついた気持ちがあっけなく沈静化され、表情も元落ち着いたものに変わる。それはヒナゲシにとって馴染んだ自分自身に相違ない本性だったが、その顔を見た三人　この異世界で出会ったとても親切な人たちは珍妙な顔をした。泣いたカラスがもう笑った、というところだろうか。すみません、お騒がせしました。いつもはこんな迷惑な子じゃないんで許して下さい。

さあ心機一転！ 昨日今日の弱虫ヘタレヒナゲシはなかったことにして、この世界の人たちに報いるべく、働きますよっ！

キリツと表情を引き締め、Lv1でも勇者らしく見えるように装う。

こここの住人の困りごとは何であろうか？ やっぱり魔族に襲われてるかそうなの？ うむ、体力に自信は皆無だが、馬車馬のごとく働く気は満々である。任せろ！

頼り甲斐のある微笑みをイメージし、ヒナゲシは言う。

「魔族討伐に行きます！」

ここでの地位確保のために。

端的に言くと、断られた。というか怒られた。意思の疎通を端折  
りすぎたかもしれない。

そういえば召喚はされたが、この世界の説明やレベルアップ法を  
聞いていない。ぬかった。

あれ、そもそも喚び出されたのは神殿とかじゃなくて人様のリラ  
ックスルームだっけ？ うん？ 向こうで本を開いて異世界に喚ば  
れるわけだから、向こう側が扉を開いてることになるのだろうか？

あれ、召喚は？

「????」

こちらが魔法陣とか何かそういうファンタジックな儀式を行い、  
あちら側にいた選ばれし勇者がどーん！ と不思議な力に導か  
れ、世界を渡るのだと思っていたのだが、それだとどこに本を開  
く必要性が出てくるのだろうか。あれ？

私、勇者だよな???

非萌えのツンデレ（前書き）

シリアスが羞恥に負けた。

## 非萌えのツンデレ

私より魅力のある『ヒナ』を知らず、私こそを『ヒナ』だと思い、ヒナゲシを『ヒナ』と呼んでくれる人がいる。

こんなこと初めてで、昏い歡びが胸の傷から溢れ出す。

少なくともあの本を開いたりしない限り、ここにヒナコが来ることはない。同じ地続きには居らず、世界を超えて離れているのだから。

運命の鎖で繋がれていた片割れがようやく離れてくれたような心地だった。

重しになっていた、足枷が外れたのだ！ もう二度と傍らで柔らかに微笑むことはない！ 私の前に立つ人が、私でない『ヒナ』に奪われることはないんだ！！

そう思う私は性格が悪いのだろう。顔も確実にヒナコより下だ。けど、これがヒナゲシ。偽らざるもう一人のヒナである。

その劣る私しか知らない人がいる。

口元を緩ませ、慈しんでくれている。

傷つけぬよう、気遣いながらゆっくりと頭を撫でてくれる。

自らの膝を差し出し、食事の世話までしてくれているのだ。

ずっとずっと欲しかったもの以上の麻薬を打ち込まれた気分だ。

中毒性があり、一度きりでは満足できない。

この優しい微笑みが消えたら泣いてしまうだろう。そっぽを向かれたらみつともなく許しを請うだろう。床に額をつけるくらいの下座を今してもいい。

村にいた頃は自覚したことなどなかったけれど、ヒナゲシはずっと飢えていたのかもしれない。魅力の差で冷遇されるなら仕方ないと諦めた振りをして、惨めったらしくもエサが欲しい欲しいと。ツンデレかよ。私ツンデレだったのかよっ!?

村での素振りを思い出し、血行が異様に良くなり汗が出た。突如赤面するヒナゲシを心配する異世界人に、今度は冷や汗が出た。

私、性格や顔が悪いだけでなく、更にツンデレだったようです。

業は深い。

勇者誕生（前書き）

マハカヒトカミ。

## 勇者誕生

脳裏では村人相手にさんざんツンデレる自分がくるくる回っていた。

べっ、別にあなたなんか好きじゃないんだからっ！

なななによっ。本当はあたしのこと見てるんでしょ！？？  
で  
しょー！？

ねえ、ヒナコより愛してよ……。

ぐあああああッ！！

言ってない！ そんなこと言ってないからあッ！！

はああ…… ツンデレという響きが衝撃すぎて、やった覚えのないことまで妄想してしまった。うん、落ち着こう私。そんな劇薬指定されるようなシナは作ってないから。セーフだから！

むしろ銀髪美形を肉椅子専用に使って歩く方が問題…… って何してんじや私イエエエエエアアアアアアアアアア！！！！

気づいたら、ソファに座っていた。

ソファって腰掛け椅子だね。腰を落ち着けるための椅子だね。ね？

なのに何で私は…… しつこく、銀髪美形に座っているのでしょうか……。

え？ ちょっと待って？

革張りの立派なソファに、銀髪美形が座ってて。更にその上に私

が座っているという構図でございますよ。

椅子に座ってる人に座るっておかしくね？　せめて隣で良くね？？

しかも横座り。私これ村で見たことある。

アツアツの夫婦だったけど……。

そしてリーゼシアさん。

昨日いきなり世話係を押し付けられたというのに、それを鬱陶しがらなくても、今も何とか髪にリボンを結ぼうとしている。ちよっ！　可愛い！　可愛いんですけどそのリボン！　私の顔面には恐れ多いですから！　やめて！

一番始めに見つめ合ったオッサンは、思うさま人に餌付けをした後どこかへ行ってしまった。炭水化物（＝パン）ばかり押し付けてくるので「ウザい！」と吠えてしまったが気を悪くしてないだろうか。

そうだ、Lv1状態も何とかしなくてはならない。

魔族云々については実在しそうだったので、やはりそこんこで喚ばれたのではないかと推測。

魔族がいるので、魔王を倒すとかも有るかもしれない。剣など持ったことはないが、出刃包丁と菜切り包丁は少し自信がある。三徳包丁は言わずもがな。刺身包丁は借りて使ったくらいだが、魔物を綺麗にスライスする必要はないだろう。

さつき全力で止められたのは見ればわかるほどのLv1つぶりだからと思う。必要とされるためなら多分包丁で何とかできる。ヒナコの鎖が離れた両手がやけに軽いから。

今私はウズウズしてるんだ。

初めて、誰かのために尽くせる。私の好意を受け取ってくれそう

な人たちがいる。

勇者として、ここの人たちの悩みを討ち払ってみせる。

## 登場人物（前書き）

これまでの人物像の紹介。外見は別の機会に。

## 登場人物

### 主な登場人物

ヒナゲシ：主人公

日本の小村で育つ。十三才。

周囲の愛情を根こそぎ奪われてきたためヒナコに強いコンプレックスを持ち、常に自信がない。

異界に渡り初めて色眼鏡なしに自分を見てもらえたため、異世界は何が何でも守らなければいけないマイワールドであり、どんな関係にある住民でもヒナコの影響を受けない彼らは貴重だと考える。

明確に守りたいものが出来たため、それ以外には冷淡。元世界も興味範囲外に転げ落ちた。

ヒナコ

同じ小村で育った従姉妹。

ギャルゲーや乙女ゲーの主人公の如く、何もしてなくても愛される日本での“選ばれしヒロイン”。

生まれた時から自発的に行動しなくても愛される地位にいたためKY、且つヒナゲシのような鬱屈した思考は理解できない。

### 異世界住民

金髪のオッサン

ヒナゲシの界渡りの際、始めに見た人物。

オッサンオッサン言われてるが、まだ四十前後と思われる。

私室に急に現れたヒナゲシだが、衝撃を上回るほど可愛い。

銀髪美形

肉椅子。

ヒナゲシが界渡りをした折、何故か彼の膝上だった。

それが彼の中の何かを開発してしまつたらしく、以降ヒナゲシの座るお膝は自分以外認めない。

リーゼシア

ヒナゲシと一夜を過ごした妙齡の女性。

オッサンと知り合いらしい。

母親以上に自分を気遣ってくれる年上の女性に、ヒナゲシはメロンメロンになっている。

**契約しました。(前書き)**

ご利用は計画的に。

契約しました。

数々の攻防を乗り越え、赤地に黒と金刺繍の入ったリボン一つで髪を結ばれた頃、オツサンが戻ってきた。

昨日のリラックスモード全開の着衣でない分、精悍さが増している。長めの金髪も丁寧に結わえられ、詰襟の白軍服のような服装だ。白は汚れが目立つと思うので、血塗れになるだろう軍服には向かないと思うのだが……金刺繍もされ一兵卒には見えないから、机仕事が主な役職かもしれない。

異世界に詳しくないヒナゲシが観察していると、ふと彼女の頭部の変化に気付いたオツサンが目を見開く。

「これは……リーゼシアか！」

「さようでございますわ」

チヨイ、とスカートを摘んで礼をとる。

その上品な仕草にリーゼシアさんも只者ではないのかもなと思つてると、オツサンが親指を立てていた。……グッジョブ？

いまいち流れがわからなかったが、ソファ前の机にズラリと書類を並べられ、真意を確かめるどころではない。

「？」

「オウフ、その上目遣いやめなさい。話が進まない、進められないからねお父さん」

父？ 何の話だ。

「これ、読めるかな？」

示されたのは何枚もの用紙。

英語に使われるようなアルファベットに近いが、よくわからない。

何故なら、ヒナゲシがアイ・アム・ア・ペン！　と言っちゃう底辺だからである。

そう、三十代後半、妻子有りの親父もヒナコの周りをうるちよろしていた。壇上には上がられる度、死にそうになる胃の腑。何度机の角で殺したいと思ったかしのれない。

「読めません」

「よし！　サインしてね！」

「……………」

脳裏に保険金詐欺とか死の気配とか生活困窮とかヤクザ来訪とかコンクリ詰めとか浮かんだが、ヒナゲシは迷うことなく羽根ペンを取った。

普通ならこういうの、犯罪に巻き込まれるかもと思うんだろう。

私も正直そう思った。

けど、そういう自己防衛を投げ飛ばしても良いほど、ヒナゲシはこの世界に感謝している。

今もこうして私の目を見つめてくれている（あつ、名前知らねえ！）

突き飛ばして蹴りを入れることもなく、膝の上に乗せたまままでいってくれる（あれっ？　そう言えばこの人も誰！？）

リーゼシアさんは一晩中私を抱きしめて眠ってくれた（ぬくぬくでお胸ぽわぽわ、五秒で天国でした！）

「これは何と読むのかな？」

「雛罌粟。ヒナゲシです」

「まるで紋章のようですね」

親にも兄弟にも埋められなかった空洞に、あつたかいものを流し

込んでくれた。

こんなに充足感を感じたことはない。

この中の誰かに裏切られたとしても、きっと感謝を忘れない。忘れることなんて、出来ない。

命なんか、あげる。私はもう、ヒナコの背中に隠れて生きられない。

だから、だから。

「よし、書けたね。これで各種契約書類は完了っ」と

捨てないで。目をそらさないで。

嫌っても憎んでもいいから、私だけを見て。

その為なら何でもするから。何でもしてみせるから。

何て、重い。

自嘲せずにはいられない。

いつか捨てられそうな気もするが、今は勇者という道がある。そこで必要とされるまで頑張るしかない。

「ほいつと」

「ええええええ!？」

バサリと紙が宙を舞う。人の覚悟を投げられた。おい!

パツ! と紙の束が発光し、消える。

「えええええええ!」

「さて、面倒な作業は終わったし、お茶にしようか」  
「いま」

「お茶請けもあるんだよ。焼き菓子は好きかな？」

「ひか」

「子供は甘いものの好きなんだっけ？ 今いろいろと取り寄せてるから、期待していいよ」

「消えっ」

「そう言えばお荷物どうなさいます？ 中に生物が入っていたら出した方が良くもせれませんわ」

「お」

「中身に興味があるから、ぜひ見せて欲しいなあ。鞆の素材も変わってたよね」

「まあ、いつまで経っても子供のように好奇心旺盛なんですから」

「ふふっ、ヒナゲシが来てから更に元気いっぱいですね。私より若く見えますよ」

「ヒナゲシにパワーをもらったのかな？ 仕事も全然辛くないんだよね」

まあ、オースティン様つたら。

いやいや、リーゼシアもヒナゲシにべったりで。

そんなことを言うクリスは膝上から離さないな？

うふふ、あはは。

聞けよ！！

とある傍観者の談（前書き）

ヒナゲシが異世界に来た時、現地住民は。

## とある傍観者の談

俄かに城中が騒がしくなったのは、昨夜遅くのことだった。

常ならば恐れ多くも皇帝陛下は執務室を下がり、私室にて酒精を愉しまれる。その際同室されるのは、宰相や大臣様方、後継者であらせられるクリストファー様がお話し相手。

会議室や謁見室ではお話できないこと、この先国を導くにあたり、どのように舵を取られるのかを話し合われている。私のような者には理解すらできないことだ。

そんな認識をしていた夜分遅くに、リーゼシア様が私たちに指示を出しに来られた。

水やらミルクやら、アルコール分が全くない飲み物を用意せよとお達しだった。

ワインを嗜まれる陛下が飲むとは到底思えないものばかり。意味不明だったが、やれと言われればやる他ないのが私たちだ。

「ああ、それと柔らかな布を出して。顔を拭うものよ。これは、今すぐに」

この場に現れるのも珍しい上に、声を掛けられたことも無かったので、現場はやや混乱の様相を呈していた。

何故、こんな場所にリーゼシア様が!?

何故、こんな夜遅くにそんな命令を??

迷惑と感じるほど未だ接触はなかったのだが、城で働く者すべてが彼女がどういう立場か、どういう立場だったか知っている。

その後どう暮らしていたかも。

彼女は、こんな風に喋る方だったろうか?

彼女は、私たちに声を掛けるような方だったろうか?

違和感と、ただ淡々と続いていた毎日の変化に、誰もが困惑していた。

必要なものを自ら運ぼうとするリーゼシア様にまた戸惑い、陛下の私室へと消えた後も誰もがそわそわと起きていた。

また何か、所望されることがあるかもしれない。

そんな大義名分に、ほとんどの者たちが起きたままでいた。明日の仕事に響くかもしれないのに。

そして案の定、変化は訪れる。

陛下ご自身が認める方しか入れない私室から、黒髪の少女が突如出現したのだ。

！！？？？

黒、という色彩自体も珍しく、本来人が持つ色ではないとされる。そんな髪色をした少女が、入った形跡もなく、陛下の私室から出て来たのだ。衛兵が顎を落とさんばかりに驚いている。

本来ならば不審人物の侵入を許したとして、首を撥ねられても仕方ないミスだが、怒られることはなかった。どころか、御三方はとても機嫌が良かった。

クリストファー様ご自身で、少女を抱いて運ばれている。

その、衝撃。その後ろに続く御三方の、穏やかなお顔。

ああ、変わったのだ。と。見かけた者すべてが思ったに違いない。

黒髪の少女と共に、世界が終わっても変わることがないと思われた、不変の事実が変わったのだ。と。

翌朝、いくら睡眠不足であっても、私たちの仕事に休みはない。

昨晚の出来事も気にかかり、恐らく誰もがリーゼシア様を気にしている（黒髪の少女が運ばれたのは、リーゼシア様の私室であった）

今か今かと扉が開くのを待ち、開いたら開いたで指示を請うように群がった。

「朝食の支度をお願いします。陛下とクリス様も御一緒されると思いますので、そのように。それから、今朝はミルクや果汁を搾ったものも。パンも子供が美味しく食べられるものがいいわ」

それから幾つか事細かに指示を出すと、アツサリ室内に戻られた。何というか……昨日の昼までのリーゼシア様と同一人物とは思えぬような変わり様だった。

給仕の際には間近で見られるだろうと踏んでいたら自らすると部屋から給仕を閉め出すし、各部屋で事務的に朝食を取られる陛下やクリス様が朝も早くからリーゼシア様の私室に現れた。通常ならゴシップ的な話題が横行するところである。

それがないのは、やはり昨夜の出来事があったから。あの黒髪の少女が、彼らの中心にいることはもう疑いようのない事実であった。

冷厳としていた城内に、一陣の風が吹き抜ける。

まずは、陛下やリーゼシア様たちのお顔を上げさせた。あの、頑ななほど表情を変えなかつたお顔を。

それはこの国にとって良かったのか？ それはまだわからないけれど。

「オッサン、まじウゼエエエエ！！！」

「はははは、可愛いなーあ、もうっ」

良いのだ、と思いたい。

クリスマス小話（前書き）

『ヒナゲシの華』、クリスマス小話。

## クリスマス小話

世間的に、クリスマスである。

りんりんりん、しゃんしゃんしゃん。

小さな商店街にもその時は来ていて。  
何故かヒナゲシも、今ここにいる。

「え、待つて？ 私地球出奔したよね？ 異世界絶賛謳歌中だよね？  
これ夢とか言う？ むしろ今までが？ うわ泣いちゃう、ヒナゲシ超泣いちゃうー」

小説で泣いたので今はご遠慮下さい。

「え、何この脳内アナウンス？ 私逝った？ 逝っちゃった？？」

クリスマスの鬼籍です。あつ、間違った、奇跡です。

「うーわー、ないわ。マジこんな展開望んでない。この後来るだろう厄災に座布団三十枚！」

座る人が落ちますね。

さて、今日はイヴで明日はクリスマスです。

世間ではきつとりア充していて素人小説読んでる人は少数派でしょうが、ヒナゲシのように「クリスマス？ 何それ美味しいの？」とばかりにパソコンや携帯やスマホに嚙り付いている人のためにクリスマスの奇跡を起こしてみました！ 人為的にね！

「あつ、きつとこの脳内アナウンスは故障してるんですよ！ 普段はこんな毒吐いたりしませんよ！ たぶん接触不良起こした機械の不調です！！」

はてさて、ヒナゲシの回想にさんざつばら出ているヒナコさん。物語の序盤で彼女の手を振りきって、ヒナゲシが異世界逃亡したために、さっぱり出演の機会を失ってしまいました。

「まるで私が悪いみたいだね！ 私も全くもって想像してなかったよ！ つーか何だこのアナウンス！？ 私にフォローさせたりすんな！」

ヒナコちゃんに直接会ったことなんてないもの、悪口なんて言えないわ。むしろヒナゲシさんの心の狭さが問題なのじゃないかしら？なんて思われてるでしょう皆様のために、わたくし召喚魔法を取得致しました！ ヒナゲシをちよっくら地元召喚し、更に今時分クリスマスパーティ盛り上がり最高潮！！ なヒナコさんを召喚です！

「ぎゃああああ！？ やめっ、やめろおおおお！！！！！！」

じんぐるべーる      じんぐるべーる      すっずつがあーあなるう

ー      ハイッ！

ぼむ。

「あつ？ あれ？ あれ？ ええ？ ヒナちゃん！？」

ヒナコ召喚 完了ッ！

「ぐああああっ！ ム力つく！ 超ム力つく！！」

「ヒナちゃん、まだ普段着なの？ もうクリスマスパーティー始まつてるよ！」

「そして案の定オマエ私が居なくなつたこと気づいて無い！ 何だ！？ その調子じゃ家族の誰一人として気づいてないの！？ 悲しすぎるだろこれ！ こんなクリスマスの日に知りたくなかつたよ！！！」

一話のクールっぷりが見る影ありませんね……あ、違つたツンデレか。プ。

「嗤つた！ 嗤つたなお前！？ クリスマスに苦い思い出しかない私の気持ちかわかんのかオマエエエエ！！！」

「ひ、ヒナちゃんヒナちゃん、何でそんなに興奮してるの？ つていつか怒ってる？ 怒ってるの？？ え……ヒナ、ヒナちゃんのこと、怒らせちゃつた？」

「そして相変わらず鈍い！ 勝手に凹むわ沈むわ、あんたこれ第三者から見られたら責められんの私なんだからね！？ おいアナウンズ！ 結界張れ！ 私このままじゃ殺される！」

え、何言ってるんですかあなた？ そんな結界とかアニメや漫画みたいなこと出来るわけないじゃないですか……。

「つてオマエエエエ！！！ 今さっきやつた魔法はスルーか！ サンタさんのプレゼントか！ 象印のステンレスか！」

やけに怒りっぱいですね。

魔法瓶とかどうでもいいんで、とりあえず『ヒナゲシの華』、宣伝して下さいよ。

「あ、何だそのためにヒナ呼ばれたの？ ヒナちゃんヒナちゃん、ヒナちゃんの可愛いとこめいっぱい皆に教えちゃおうよっ！」

「私より可愛いお前に言われてもな……」

「ヒナちゃんもすーごく！ 可愛いよ」

「『も』って言ったな？」

「えとえと、皆さんメリークリスマスっ！」

「聞き流した！ お前やつぱりその言動わざとだろ？」

「ヒナは、ヒナちゃんの従姉妹で大親友の、ヒナコって言います！ 小説の方にはあまり出てないんですけど……ヒナちゃんばっかなんですけど……ヒナコのこと覚えてて欲しいな！（ニコッ）」

「（ああ……読者の皆さんもヒナコに取られるのかな。ここ日本だしな。私可愛くないしな）」

あらー、ヒナゲシさんのHPがどんどん削られていってますね。

ヒナコさんが隣に並んだ瞬間から、ゴリゴリ削られていってます。

あ、赤ゲージ。

ちなみに頭上に何かマークが……髑髏マークみたいなんですけど、何でしょうか？

「（聖夜に死ぬとかシャレになんない。それもヒナコの側で。私ちやんと埋葬されんの？ 魂はあの世界に戻りたい。魔物に殺されてもいいから、あっちの世界で死にたかったよ……）」

しゃんしゃんしゃん。りんりんりん。

「…ん」

「おや、目が覚めたのかな？」

「クリスマス様、ヒナゲシの肩から毛布がずり落ちてますわ」

「今日はとても寒いから、風邪を引いてしまいかもしれないよ。ブランドーを少し入れてみるかい？」

「まあ、オーステイン様だったら」

頭の片隅で鈴のような何かが鳴り響いてる気がする。

まだ夢心地の気分で目を開けると、クリスマスの膝上で暖かな布に包まれ、抱きしめられていた。

「……リーゼシアさん？」

「はい、ここに居りますわ」

寝過ぎたのだろうか、瞼が泣いたように腫れぼったい。

その部分に細く冷たい指が触れる。

ああ、と安堵するような吐息が漏れた。

「こわいゆめ、みたかも」

きゅんと縋るように手のひらに甘える。

まあ、とリーゼシアの優しい手のひらが、ヒナゲシを甘やかすように撫でた。

あの村は、もう要らない。

実の親だって、血の繋がった兄弟だって、要らない。十年以上いたという元居た歴史だって捨てて良い。

私が今必要とするのは、私に触れてくれる手のひらだけ。

どれだけ薄情と言われようが構わない。

懐かしさなんて、今この心地良さに比べたら、屁でもない。

ここで紙のように儂く散っても構わないとすら思う。

「リーゼシアさん」

「はい」

「私、クリスマスって……嫌いだな」

クリスマス？ と訝る声が三つほど聴こえたけれど、それに応える気にはならなかった。

どうせこの世界には、クリスマスなど無いのだから。

赤いのと緑の（前書き）

やはりそこは異世界ですから。

## 赤いのと緑の

「ほいつ！」

勢いよく両腕を振り上げてみる。

白い紙が重力に従い、上から下へと落ちて行く。

それはとても当たり前前の光景、なのだが。

「解せん」

契約らしきことを為した後、本当に茶会のような有様になってから、オツサンと銀髪美形は出て行った。仕事があるのだという。

リーゼシアも釈然としない私のためにも何も書かれていない紙を手渡してから、用事があると言ってこの部屋を出て行った。

本日初めてまともに椅子に座り、摘んだ紙を矯めつ眇めつしている私、ヒナゲシ。

あれはやはり選ばれし者にしか使えぬという、魔法なのか……。勇者特典で何とか自分も使えないのかなあ、と色々試してはいるのだが。やはりL.V.1には使えない、ということか。

リーゼシアさんが置いていってくれた荷物をたぐり寄せ、水筒を取り出す。まさか一晩経ってから使うことになるとは考えなかったので、中のお茶は温くなっていそうだ。

幸いすぐダメになるような物を入れていない。良かった、アイスとか入れてなくて。個包装のチョコレートも無事である。

『その“黒いの”、何だ？』

大袋から取り出したチョコレートの包装を剥いていると、声がした。子供特有の、甲高い。

「……………」

少し躊躇って、確認すると。

『?』

赤いナニかが、いた。

2〜3歳児ほどの大きさの、赤い髪の毛の。

目鼻口もあるし手足もあるんだが、奇怪なのはその瞳だった。瞳孔も白眼部分もない。ただ赤い瞳。

「……………チョコレートっていう、お菓子」

『菓子?“それ”が?』

とりあえず相手の望む話題を振っておく。

包装を解いたそれを差し出すと、躊躇いもなく受け取る。

ぱく。

しばらくは舐めていたようだが、噛んで砕いたようだ。

『甘い!』

驚いたような表情が、まさに子供。

けど人間に白眼がないとか瞳孔がないとか、あるんだろうか?

「こっちはナッツ入り」

『ナッツ？ ナッツって何だ？？』

ぱくぱくぱく。

ガリガリガリ。

むしゃむしゃむしゃ。

ひとしきりその人外らしき子供とチョコを貪り食う。

喉が乾くだろうからと水筒用の小さなコップに温い茶を入れて差し出すと、これも警戒することなく飲み干した。

『苦っ！？』

「緑茶だからねえ……」

確かに冷めると苦いかも。というか私は何でこの子とお茶をしているのでしょうか。

すると今度は目の端に緑のものが映り込んだ。

やはり2〜3歳児ほどの、ナニか。

ててと赤い髪の少年に駆け寄ると、

ガン！

と殴りつける。

赤髪の少年は悶絶した。あ、涙目。

『つてえー……！』

『この、バカ！ 何で勝手に姿見せてんの！』

ミニマムで赤と緑なクリスマスカラーなそれらが、揉めている。

何かめっちゃくちゃ可愛いんだが。

というか、本当に一体これは何なんだ。  
髪も瞳も服も靴も同一カラー。まるでペンキを頭から被ったよう  
だ。

『すみません、お騒がせしました』  
「いえ……」

理知的な緑の目がこちらを見上げて詫びた。  
その手がぐいぐい赤髪の子の頭を押さえつけている。力関係が垣  
間見えた。

再度頭を下げると 消えた。

「え」

この部屋の中には、私一人。  
それは数分前には確かなものだったのだが。

「お待たせしました、ヒナゲシ。お服のご用意が……ヒナゲシ？」  
「えええええつ」

小人さんとお知り合いになりました。  
さすが異世界。

着替えと水色の（前書き）

まだまだまだ居る。

## 着替えと水色の

先の赤いのやら緑のは何だったのか。

きよとんとするリーゼシアさん（私の服を調達してくれたようだ）をよそに、机の下から棚の後ろまで覗き込み、あの小ちゃいのを探してみるのだが、いない。どこにも居なかった。

狸に化かされた気持ちになりつつ、こちらでの普段着を手取る。住むどころか永住する気満々の私にとって、元の世界で着ていた服を脱ぐことにも躊躇いはない。

幸い、手渡されたのはワンピースだった。ちょっと襟ぐりが詰まっているようだが、長さも膝下であるし、違和感はない。

が、ジッパリーというものがないのか、布紐で首の後ろや腰周りを縛るという着衣法らしい。一人で着替えようとして、ものの見事に失敗した。

「うーん、首紐に集中すれば服が分解し、腰紐に集中すれば上半身部分が手から離れ……複雑なんだなあ」

「慣れれば何ともありませんわ」

リーゼシアがはらりと解け落ちた腰紐を手に笑っている。生まれの時からこれが定番だとしたら、まるで幼児のような失敗なのかも。うう、恥ずかしい。

ここは恥をしのび、手伝ってもらうしかないか。そう、心が決まったところで。

『まず腰紐を先に結ぶですよ〜』

完全にバラけてしまった布を拾い集める存在が。

『この布と、この布を持つですう。それから、こっちの手をこうして……』

ちよこまかとヒナゲシの足回りを移動しながら、水色のつむじを見せている、ソレ。

『手でここを押さえて下さいですう』

しがみつくように小さな手のひらが、布を押さえている。見上げる瞳は、淡い空色。

「……」

こう、こう。と示される場所を無言で押さえ、小さな女の子の指示を聞く。

リーゼシアは何故か顔を反らしつつ腰紐を寄越してきた。ちよつと、一緒に現実見て下さいよ、ねえ。

『ここを縛って……えと、首に届かないので』

「あ、ごめん。こう？」

『ありがとうございます』

「いえ……」

『こうして、こうして、後ろで可愛く結ぶですよ』

「はい……」

小人が。先ほど一緒にチョコレートを食べた少年と、殴って謝罪していった少年と、激似のナニかが私の首紐をうんしょんしょと結んでくれてるんだが。

『出来ましたですよっ』  
「あ、ありがと、うっ？」

えへへと笑顔の少女は全く邪気がない。

2、3歳児ポディに、瞳孔・白眼まなこのない眼。知性を感じさせる言動に、相変わらず上から下までペンキー色状態。この子は水色だが。

『とってもお似合いですよっ？』

ぱたぱたと手を上げ下げし、その興奮を表している。何か可愛いな！

「えっと……」

小人さんって呼びかけるべき？ それともキミとかあなたとか？  
ってか、この生き物何なの！

苦悩していると、またも聞き覚えのある声が増えた。

『うん、まあまあ似合ってんじゃない？』

それは先ほどの部屋で聴いていた、

「赤い」

『てえええんちゅううううですううううう！！！』

吹っ飛んだ。

水色のに右ストレート食らわされて。

ガタガターンッ！！

と派手な音を立てて、椅子二つが少年と一緒に倒れ込む。後は静寂ばかりだった。

「……………」

水色のは意外に激しいんだね、とか。赤いのは別に痴漢のつもりはないんじゃないかね？ とか。君ら二人とも緑の少年に殴られるんじゃないの？ とか。色々思ったんだが。

とりあえず、私が語るべき台詞はこれじゃないんだろうか。

「君ら一体何なのさ」

UMAユーマじゃないっすよね。

着替えと水色の(後書き)

UMA……未確認生物

年末小話（前書き）

実はまだ気付かれてないとか。

## 年末小話

「あら、ヒナちゃん！ ヒーナーちゃんっ！！」

不躰なほど名を呼ばれ、ヒナコは苦笑して振り返る。

村を歩くと、こうして声を掛けられるのはもはや当たり前。ちょっとしたおやつをくれたり、物をくれたり。おかげでヒナコは『物が不足する』『ひもじくなる』といった経験はない。

以前そう言ったら、ヒナちゃんが痛いものを堪えるような、奇妙な顔をしてたっけ。

「どうしたんですか？ おばさん」

「これこれっ。これ余っちゃったから、あげるよ」

手招きしたのは、ちょうど思い浮かんだヒナゲシの母親だった。

ヒナコの母親と姉妹だけあり、顔も雰囲気も、どことなく親しみやすい。子供の頃から側にいた人でもあるし、ヒナコにとっても母のような人だ。

それでも、十三となった今では、敬語を使って話すことにしている。というのも、すべてはヒナコの配慮だ。ヒナゲシのための。

ふとヒナゲシの小さな頃が思い浮かんだ。赤ちゃんの時から傍らに居ただけに、写真と遜色ないほど鮮明なもの。

ヒナコがよく笑うなら、ヒナゲシは常に悲しそうな顔をしてる子供だった。一緒に遊んで、ずーっと側にいたのに。

それは誕生日パーティや親戚の集まりの時にそのまま、ヒナコはずっと楽しそうにすれば良いのに、と思っていた。自分たちのために集まってくれているのに、嬉しくなさそうな顔をしたら、相手もきつと嬉しくない。

だから、よく言ったものだ。「ヒナちゃん、笑わなくちゃダメだよ」と。

それなのに結局いつも楽しそうにしてお礼を言うのはヒナコで、人嫌いのようにヒナゲシは距離を置こうとした。そんなんじゃ、きつと浮いちゃうのに。

そうして時が経つとヒナコの懸念はやっぱり当たって、年末年始の集いがあっても、誰もヒナゲシの名前は出さなくなった。おばさんは娘が居なくても「いつものことだから」と笑うようになったし、お兄さんやお父さんも全く気にしてる素振りは見せない。

ヒナゲシが離れる分、自分がヒナゲシの家族と近くなっていく。まるでヒナコがその穴を埋めるみたいに。

そういうことを繰り返していたから、日常にも反映されていく。普段からヒナコも気にしてくれるし、家族のように扱ってくれる。

その度にヒナゲシは能面のような顔をした。きつと家族を取られたと思ってるに違いない。そんなんじゃないのに。

違うんだよって伝えるために、おばさんと接する時は敬語にした。おばさんはかなり残念がってくれたが、これもヒナゲシのため。

「ありがとうございます」

「今年は何でかこんなに余ってねえ。いつもはほつといても誰かしらが食べてなくなっちゃうんだけど。今年に限ってお兄ちゃんも要らないって言うんだよ」

「え？」

手渡されたのはたくさん干し柿だった。ヒナゲシが大好きだった筈の。

秋になると食べるものが美味しい、とよく持ち運び可能な栗や柿を外で食べていた。干し柿も小脇に抱えて食べていたように思う。

「これ……」

「ああ、気にしなくたっていいよ。私もあんまり好きじゃないしね。それ、まだ一個も減ってないんだ」

おかしいよねえ、毎年こんなにたくさん買ってんのにさ。

不思議現象のように笑っていたが、ヒナコは目をぱちぱちさせた。

今年はヒナゲシは干し柿を食べていないのだろうか？ 毎年あんなに美味しそうに食べていたのに？

両手いっぱい抱えた干し柿だけが置いて行かれた気になって……

「ヒナちゃん？」

妙な寂しさを覚えたのだった。

赤いのと緑のと水のと黄のと……えーい皆でお茶にしようー！(前書き)

雷様とは言わせない。

赤いのと緑のと水のと黄のと……えーい皆でお茶にしよう！

「精霊ですよ」

現実を見ない振りしてたのかと思ったりリーゼシアさんは、あっさり解説してくれた。

てか、精霊？

「え、精霊って森の中に住んだりするアレ？ 羽根生えてたり空飛んだりする生き物？」

「羽根？ いえ、それは聞いたことがありますけれど……そうですわね、確かに自然に根付いた存在かしら」

案の定出てきた緑の少年が決まり悪げにしているのに対し、水色の少女は椅子に落ち着き給仕されている。どうやら赤いのと同じで、チョコレートが気に入ったらしい。その赤いのはというと、

『踏むなよ！ 爪先使ってグリグリすんな！ ってでででイデエーっ！！ だからって膝はないだろ！』

緑の少年の足下にいた。

少年……理知的で落ち着いた印象だが、実はSっ子なのか？ お姉ちゃん、ちよっと君の将来が心配だよ。

「何でこの部屋一室にこんなに精霊集まってんのかな。それともこれって普通のことなの？」

何となくゲームプレイした先入観で言わせてもらえば、赤い少年は火の属性、水色の少女は水の属性っぽい。台所に集まるならまだ

しも、三人揃って一箇所に留まるなんてことがあるのだろうか？

「あ、それは……」

「すみません、まだ言えません」

困るリーゼシアさんの言葉に被せるように、緑のが言う。何か事情があるものと察せられる。

「僕たち本当は人に見られるのも禁じられてるんです。ましてや交流なんて」

「うん、ダメなのはわかったから、止めを刺すのはやめようか」

赤いのが必死にタップしてるから。バンバン床叩いてるから。

「お前らほんと要領悪すぎ。つか、頭悪い」

甲高い声が、四つ目。ぎょっと振り返ればちっこいのが増えていた。

「黄の」

「緑もバカ正直にあいつらの言うこと聞いてんなよ。一から十まで聞いてたら、いざって時動けねえっつ」

口を動かしながら頭を突っ込んでるのは、私のリュックサック。

……おい。

赤、緑、水色ときて、お次は黄色らしい。

上半身は未だカバンの中であるが、黄色い下半身がもぞもぞと蠢いているのが見えた。

道理で発言すべてがくぐもって聴こえた筈である。

『ちよ、黄の!』

『っんだよ、うっせえな。ははぁん、この黒いのが赤が自慢してたチヨコか。ふんふんふん……甘ったるい匂いしてんな。でも悪くねえ。他には』

「うんうん、君もチヨコ食いたいか。わかった、わかったからそこから出ような。人の私物だからね」

ずるーつと両足掴んで引っこ抜くと、これまたアニメか漫画かと突っ込みたくなるイエローヘアが現れた。

『…………あ?』

素晴らしく目付きが悪いお子さんだ。将来ヤクザ屋さんにもなりたいのか。

「とりあえず、リーゼシアさん」

「はい」

私は真面目な顔で振り返った。

「お茶にしよう。お菓子もプリーズ。残り少ない向こうのおやつが食い尽くされる前にねっ!」

## 年始小話(前書き)

あけましておめでとう、いっせよ、あけましておめでとう。

## 年始小話

お年始である。

日本人のお年始と言えば、前日の年末から続いてとても忙しいのが定番。

何しろ十二月は師まで走るのである。

何もしなくて良いと言われても、年末になれば「大掃除をしなくても良いのか?」「年賀状はすべて出したか?」「蕎麦は用意したか?」と焦り始めるのが日本人。  
いわゆる“落ち着かない”ってヤツだ。

除夜の鐘をブラウン管越しでも良いから聴いて、こたつでごろごろまったりして、ビタミンC摂取がたらミカンを食べて、年越しに備える。

年が明けたらもう食糧確保は出来ない。

ヒナゲシの村は小さいから、店は元旦どころか数日は冬期休業に入ってしまう。

代わりにおせち料理を食べ尽くすまでそれになる。これも風物詩。雑煮をつつきながら正月番組を眺めて終わる。

家庭によっちゃこれに親戚総出の集まりが加わり、ガキンちよどものとの攻防やおじさんおばさんズのお節介に翻弄されるのだろう。空気のヒナゲシには全くもって関係ない話だが。あつ、泣いてない、泣いてないよ!

異世界にはどうやら冬にある筈の年末年始という発想が無いよう

で、こういった騒ぎにはならないらしい。むしろ越冬のための食糧調整やらで、淡々と忙しい印象だ。

この世界に骨を埋める決意をしたとはいえ、生粋の日本人であるヒナゲシにはちょっと物足りない。

「というわけで、日本の風習を強引に持ち込んでみようと思います」  
「は？」

ちなみに揃ってキョトンとしてる精霊ズも強制参加。

同じ釜の飯ではなく、同じ袋の菓子を食べた仲間である。……うん、別に食い尽くされた恨みなんてないからね！

「お世話になった人たちに、カードに御礼を書くんだよ。それでもって、今年もよろしくってお願いすんの」

うんうん、特に私や君たち精霊は食っちゃ寝の扶養家族だからね。普段リーゼシアさん達にお世話されっ放しなんだから、たまにはこうした感謝の気持ちを表すのも良いと思うよ！

「え〜面倒くせえー」

「おやつも食べたくないの？」  
「やる」

赤いのは本当に素直だ。

はじめに餌付けに成功したからこうなったのだろうか。精霊にしては食い意地がはっているが、この程度なら御せれなくもない。

「去年の出来事をなかったことにし、今年一年の迷惑を先に詫びておく。合理的ですね」

「そこ、年賀状の存在意義を黒くしない」

緑のはしきりに感心しているが、激しく方向性が違っている。

冷静だし自発的に問題を起こす子ではないのだが、見てて不安になる子ではある。主にDS的なナニカが。

『メリット何もねーのにやるわけねー、あとヒナゲシ肩揉め』

「お前は足を机に乗せんな、吊るすぞ？」

黄色の精霊はマジに態度悪い。それに引きずられるように自分までが口が悪くなっているような気がする。いつそもう本当に窓の外に吊るすか。

『ヒナゲシにも書くですよー』

「うっ、なぜか涙が。お願い、君だけは変わらないでいて」

少年組を見た後に水色の少女を見ると、目頭が熱くなる。

彼女は私の心の防波堤。居なかつたら精霊のことを完璧に誤解してた。ありがとう、マイドリームは守られた。

日本から持ち込んだカラフルなペンを渡し、自分の分の白紙カードと向かい合う。

身の回りのことを全てやってくれているリーゼシアさん、膝抱っこしてくれるクリス、鬱陶しいものの色々都合してくれるオーステイン。書きたいことは山とある。

村で泣けなかった私が、胸に鬱屈を溜め続けていた私が、全部全部吐き出すように泣けたのは、ヒナゲシという存在を初めて認識してくれた彼らのおかげ。

ヒナコの居ないこの世界は、雁字搦めに縛られていた私の心を解き放ってくれた。今もまだ、ヒナコの存在が恐ろしいけれど。でも、

ヒナゲシを見てくれる人も居るのだと教えてくれたから、私の心に自由をくれたから、感謝せずにはいられない。

ありがとうございます。

新しい一年も、どうぞよろしく願います。

『ヒナゲシー飽きた、チョコくれ』

『もうなくなったって言っただけ？ 赤のがばくばく遠慮なく食べるから』

『ヒナゲシに飴をもらいましたよう。とっても甘くて幸せになるですう〜』

『餌付けしてんじゃねーぞ。俺にも飴寄越せ』

私の名を呼んでくれるこの世界に、すべての人に、あけましておめでとう！ どうか新しい一年も、楽しい仲間と過ごせますように！

涙（前書き）

触れて。抱いて。あたためて。

## 涙

村で生活していた頃、ヒナゲシは孤独であった。

運悪く、ヒナコという神から愛されたとは思えない少女が側にいたため、周囲の関心は軒並みヒナコが奪っていたのだ。

従姉妹という同族であり、同い年、同性、近所、などなど一緒にされざるを得ない機会が山ほどあった。その際、どうしても片割れに目がいく。華があり、反応も快く、親交を深めたいと願うのは、いつだってヒナコの方。

ヒナゲシ自身に難があり、嫌われるならまだ諦めがついたかもしれない。だけれども、嫌われるほどの関心すら抱かれなかったのだ。その事實は片方の少女をととても苦しめた。見て欲しいのに、見てもらえない。誰かに認識される自信を与えられず、亡霊のように生きて。

教師も好きな人も、親でさえ。ヒナコの後ろにいるヒナゲシの存在に気付かない。どこまでもどこまでも空気。

それ故、人との交流など無いに等しく、余白の時間はゲームプレイにあてられた。ゲームのプレイヤーになれば、イコール主役。そこにヒナコの影はなく、とても生き生きと敵を倒したり、ギルドの依頼を請けたり、友情も恋愛も思いのままに叶えられた。

精霊やエルフという人外に協力され、魔法を使えるようになったこともある。他種族の人間であつても、勇者だから認めてもらえ、友情まで育むことが出来たわけだ。

火の精霊。水の精霊。土の精霊。そういった自然の神秘が形になった者たちは、宙に浮き、空を跳ね、自然を自在に操る。見目も美しく、抜群のプロポーションで勇者を勝利へと導くのだ。

と、思っていたのだが。

『あーっ！ 黄の、てめえっ！ 俺の手から奪うなよ、欲しけりや自分で手に取れよっ！ なあヒナゲシ！』

『あ？ 赤の、てめえこそ何様だ？ 俺様に楯突こうなんざ百年早えんだよ！ だよなヒナゲシ』

『そう言うお前が何様だよ。赤のもほら、ここにまだたくさんあるから落ち着きなよ。ねえヒナゲシ？』

『うっ、喧嘩はダメですよっ。ヒナゲシいいいい』

ちっちゃいチマチマしたのが、人間を巻き込みながら揉めている。主にヒナゲシを。

個々の椅子では収束がつかず、やむなくソファーに移動。赤のと黄のがすぐに怒鳴り合いを始めるので、自分が間に入ろうとしたら即座にそれを読んだ緑のと水色が両脇を固める。おかげで赤のと黄色のが遠慮なく喧嘩を始め、やや離れた場所から緑のと水色が苦言を呈す。ちよ、君ら全員私に同意を求めな！

やむなくチヨコの大袋を進呈する羽目になった。二度と調達出来ない最終手段であったが、ヒナゲシは子供の引率などしたことがない。わきやわきや騒ぐ口を黙らせるにはこれしかなかった。さらばだ、メイド・イン・ジャパン。きつともう二度と会えまい。

「ヒナゲシの住んでいた国の茶葉は変わってますのね。薄い緑でも綺麗……」

冷めていて申し訳ないが、水筒に残る緑茶に口をつけたリーゼンアさんはその色と香りにうっとりしている。お茶が好きなのかな。

「これは冷めちゃってますが、茶葉を持ってきていたので、あつあつの日本茶をごちそうしますよ」

「まあ、ヒナゲシ！ わたくしのために？」

それはもちろん、他ならぬリーゼシアの希望なのだから。

部屋にティファールのポットを置いてあって良かった。部屋で茶の準備が出来るからこそ、茶葉まで入れていた。緑茶ほうじ茶玄米茶、何でもござれだ。残念ながら紅茶コーヒーの類いまでは用意してなかったが、それは致し方ない。

「まあ、まあ。嬉しい……ヒナゲシがわたくしのために？ わたくしのためだけ？ あああとっても嬉しいわ。お茶会がとっても楽しみだわ。うふっ、こんなに心が浮き立つのは久し振りね！」

どうして自分のやることに、異世界の彼女がこんなに喜んでくれるのかわからない。昨日会ったばかりだし、ヒナゲシはまだリーゼシアに何かしてやれたことなどないのだから。

「そのうち我慢できなくなったオースティン様が戻って参りますわ。クリスマス様も。その時にお茶をごちそうしていただけませんか？」

「別に構わないけど……オースティン？」

「ええ、金の髪を持つオースティン様。銀の髪を持つクリスマス様。お二方がこの国でのヒナゲシの後見人ですわ」

「ええーっ、そうなんだ！」

ひよっとしたら、先ほどの契約ってのはそれだったのか！

なるほどなるほど、勇者としてやっていくにも十三の小娘ならば後ろ盾の一つや二つ、要るだろうって配慮か。うわあ、本当にありがたい召喚だったのかも。オースティンとクリスマスは国の偉いさんとか上位貴族とか、そういう立ち位置？ 部屋も庶民的とは言えない装飾であるし。てことは、やっぱりリーゼシアさんもお貴族様かと思われる。

「うわーうわー、それじゃあオースティンとクリス、あ、様付けた方がいいのかな？ ちゃんとよろしく言っておいた方がいいよね？ あ、リーゼシアさんも？ 一晚経ってからで今更感ハンパないけど、これからよろしく！」

膝の上に水色がゴロンしてるから立てないが、丁寧に頭を下げる。赤の他人に、過ぎる親切をしてくれていたのだ。ヒナゲシは、ここで必ず彼女たちに報いなければならぬ。

「ヒナゲシ！ 頭を下げる必要なんて！」

勢いよく首を振り、傍らに跪くリーゼシアさんは何故だか瞳を揺らしていた。不安？ 焦燥？ 見抜けるほど人生経験は積んでなかったが。どこか、ヒナゲシの瞳に通じるものがあった。

だから、惹かれ合うの？ だから、側にいたいと思うの？ 私たちが求めているものは、同じなのだろうか？

「リーゼシアさん。私、村にはもう居場所がないんです」

重ね合わせた指は、細く、労働に向かない繊細なもの。温かさはなく、冷たい。まるでとても冷たい水に浸かっていたように。

「うっん、最初から無かったのかも。ヒナゲシが居る必要なんか無くて、同い年のヒナコが居ればそれで良かったの」

「……はい」

「何を言ってもダメでした。ヒナコは明るくてよく笑ってて、屈託がなくて。みんなみんなヒナコが好きになる」

「……ええ」

「でも、私は私以外にはなれない」

きゅ、と指が強く絡む。

見上げてくる瞳にあるのは、激しく燃え盛る想い。チラチラと火の粉すら見える気がする。

同じだ、とリーゼシアさんの答える声が聴こえた。指を通して。そう、リーゼシアさんもヒナゲシと同じなのだ。たぶん。きっと。

「……リーゼシアさん。この異世界に来て初めて、“ヒナゲシ”は人として生きることが出来てます」

「ヒナ、ゲシ」

「ここにはリーゼシアさんが居たから。オースティンやクリスが居たから」

「ヒナゲシ！」

下睫毛の上に、ぷっくりと温かな雫が乗った。

出会ったばかりの私が、ヒナゲシが、耐え切れず零したものと同じ 涙。

昨晚とは逆に、ヒナゲシがリーゼシアを胸に抱いて。

「ヒナゲシ……ヒナゲシ！」

「一晩中抱きしめてくれて嬉しかったです。みんなみんなヒナコに視線を奪われる中、私を懐に入れてくれる人なんか居なかった。好きになっても、好感どころか感情を返してくれる人すら居なかった」

「あ、ああ……ああああ！」

泣き崩れたリーゼシアを抱きしめ、ヒナゲシは考えた。

私も、昨夜自分を抱きしめてくれたリーゼシアさんみたくなれるだろうか。膝抱っこしてくれるクリスみたくなれるだろうか。食べ物差し出してくれるオースティンみたくなれるだろうか。

誰だって、自分を認識して欲しい。嘘偽りのない“自分”という

人格を見て欲しい。尚且つ、触れて、温めてくれたら　　自分は今  
生きていると心が震え、満たされるに違いないから。

『ヒナゲシ』

『これ、使って』

『あと、これも』

『ほれ』

「……ありがとう」

次々と精霊たちから渡される布は、ヒナゲシの手に渡ってリーゼ  
シアの涙が拭われる。人との繋がりとは、きつとこのようなものな  
のだろう。

生まれて初めて人の涙を拭いながら、もつとこの人たちと繋がり  
たい、あたたため合いたい。そうヒナゲシは思った。

## 保護者会（前書き）

『お子さんの迎えは六時までにはお願いします。  
やだぁあああ！！！！』

## 保護者会

何かを吐き出すように泣くリーゼシアを成長途中の体で包み込み、この少しばかり低体温の体をあたためた。

菓子類に執着を見せていた精霊の子供たちも無神経に食べ続ける真似はせず、そっと寄り添い、体温を分け与えるようにひと塊でいた。精霊とはいえ、優しい気遣いが出来るとわかる。瞳が人と違って、良い子たちなのだ。

「おやおや……リーゼシアが泣くななんて珍しいね」

からかうような台詞でありながら、棘のない穏やかな声音が現れる。仕事を終えた金銀二人だった。

「ええと、オースティン、様？」

「様は要らないよ。まるで私とヒナゲシの間に上下関係があるかのようだから。それより、リーゼシアはどうだい？」

「失礼を……オースティン様、クリスマス様」

涙を出し尽くした声は嘎れ化粧は落ちていたが、恥じ入ることなどなかった。この涙は自分の誇り。何を恥じる必要があるのか。

「ふむ。リーゼシア、影は消えたかい？」

「はい。……わたくしも随分と引きずられたものです。二人はもう亡くなったのに」

「後悔は？」

「いいえ。わたくしは自分を蹂躪する者を赦さない。絶対に」

リーゼシアの瞳が鷹のように煌めいた。一時完全に喪われていた

その強さに、オースティンは安堵する。

「それで良い。その誇りがあつたからこそ、ヒナゲシと出会えたのだから」

二人の会話が何を指しているかヒナゲシにはわからず、またクリスも何も言わない。その横顔は凍てつき恐ろしさを感じるものだったが、それは話している二人にはないようだった。

彼にもあるのかもしれない。

ヒナゲシを見る時には甘く、オースティンやリーゼシアを見る時には親しみを含んでいるその瞳の奥に。リーゼシアが何らかの悲哀や絶望を隠していたように。

でも、きっとそれが人間というもので。それを理由とする罪深さとか悲劇もあり得るのだろう。ならば私が三人を敬遠することなどあり得ない。ヒナゲシはそれを知っている。

「リーゼシアも落ち着いたようだ。次に話を移したいんだが、いいかな？」

「次？」

何かを秘めた瞳が、こちらを振り返った瞬間イタズラめいたものに変わる。どうしよう、やたらめったらキラキラした目が怖いんだが。

「その周りにワラワラしてる子供たちなんだけどね」

『あっ！』

「あっ？」

『ああー……』

『うああ……』

思い出したように頭を抱える緑の。その他の精霊も思い思いの青い顔をしている。ふてぶてしいのは黄色だけか。平常運転だね。

「えっと、彼らが何か？」

「いやー、清々しいくらい自分の仕事忘れてるなと思って」

「彼らの仕事？」

「やばい、まずい、怒られる……」

ニコニコしているオースティンに、首を傾げるヒナゲシ。緑のが顔を青くして（おおお髪も目も服も緑なのに！）呻いている。あのサドっ子が。

「お、怒られるですう〜」

水色のが泣き出した瞬間。

「わかってんじゃねーかクソ餓鬼ども！」

ガンツ！ ゴンツ！ バシインツ！

盛大に物を殴る音が三つ続いた。

ぱちくりするヒナゲシ以外、動揺はない。

突如として出現した異様にカラフルな面々にも。

「まったくお前ら、まともにお使いも出来んのか！ 俺あ影から見守れって言ったんだ！ 影から！」

勢い良く説教をかますのは、燃え盛る紅蓮の炎を纏った青年だった。小さな赤いのを大きくしたような。

『生まれたばかりの精霊の子供ですからね。早々にバレルのではと思っていました。まさか任せた当日に茶会をするとは。いやはや、私の読みも浅かったものです』  
『ひゅ、ひゅいまへんんん』

あのサドっ子が、無防備に緑の青年に頬を抓られている。微笑みながら指に力を込める青年と、涙ぐむ緑の対比が哀れ。

『お前な？ 下手こくなら最初っから手を出すんじゃないよ。後片づけが大変だろ？ この俺様がな？』

妙な諭し方をしているのは、黄色い男性。ボサボサの髪をがりがり掻き篋りつつ、そっぽ向いた少年に語りかけている。

『あなた、ひよっとしたら自分から姿を見せたんじゃないの？』

『う、はいです……』

『やっぱり』

水の精霊は美しい八頭身の女性だ。水のような長い髪と裾をひらめかせ、やれやれと困り果てている。

何でしょう、今日は精霊フェスティバルですか？ 完全にRPG。ゲーム画面で見たような光景が広がっている。大小揃ってるのが微笑ましい、が概ね小さいのは涙ぐんでいるようだ。

「うん、まあ、ヒナゲシと仲良くなったのならそれでいいんだけどね」

「えーと、事情がよくわからないんですが？」

彼らは親子なのだろうか？ でもって、小さいのは大きいのに命

じられて、この部屋にいる？

「彼らは自然に根ざした精霊だよ。それも最近生まれたばかりのね」

「はあ、えと、親子……？」

『ありえないからっ！！！！』

数力所から悲鳴のような声が上がった。途端に室温が五度ほど下がる。

慌てふためいて口を閉じた小さいのに、無言で圧力をかける大きい精霊たち。怖い。怖いから、君ら。

「精霊は子を成さない。自然から生まれるものなんだ。この子供たちは別格だけどね。移し身みたいなもんで、彼ら自身が作り上げた精霊……かな」

『曖昧に答えしないで下さい、我が主。精霊という神聖なる存在が誤解されてしまいます』

オースティンの説明に、すかさず注意が入った。緑の青年は細かい部分も気になるタイプか。姑か。

「ああー……えっと、あまり難しいことは言いたくないんだよ。つまらない話だし、こちらの都合だから」

『そのあなたの都合で精霊の子を作ったんです。せめて説明くらい正しくして下さい』

「えー、あー」

『主、本来精霊は自然に生まれ、自然に消え行くもの。それを捻じ曲げてこの子たちを作らせたのは、主、あなただけなのよ』

おお、今度は水色のおねーさんに叱られている。シュンとするオッサン、哀れ。

しかしこの大きな美しい精霊たちの主がオーステインで、その命令でちみっこいのが生まれたというのがわかった。わかったが、理由はわからん。

「えーと、あの？」

「ああ、あなたに怒っているではありません。我らはオーステイン様に怒っているのですよ」

ぼん、と肩に乗る緑の青年の手のひら。片腕は未だ少年の頬を抓起上げている。……子どもの柔らかな頬が無惨なことに！

「そつだ。それとこの餓鬼どもにな？」

「いいいいいいいいいいいい！」

赤いおにーさん、ちびっこが可哀想なんで、そのヘッドロックを外してあげてくれませんか。技のかけっぱは危険だと思えます。そして頭にのし掛かるのはヤメテ。重い重い重いっ。

「まあ、バレちまったもんは仕方ないわな。幸いコイツらお前さんに懐いたみたいだし、これで堂々と側に置ける。見ただけで精霊の加護がハンパねえのはわかるし、下手に人間をつかせるよりよっぽど危険はない」

「ん？ んん？ 危険って？」

黄色い男に投げられる言葉を正確に受け止められない。精霊の加護？ 側につける？ 危険って何が？

「もし万が一、ヒナゲシ、君に危害が加えられてはいけない。その用心に、精霊の子をつけた。そういうことだ」

「クリス……」

具体的な精霊の加護というのはわからないが（だってちみっこいし、菓子食べ尽くす勢いだし、フリーダムだし）、ここで過ごすのに護衛をつけてもらえたんだと解釈する。……勇者って何らかのミッションこなして信頼を得、初めて加護が貰えるもんなんじゃないだろうか。いいのが、イキナリ精霊GETだぜ！

「ええと、とりあえず、これからよろしく？」

『うわああああんヒナゲシiiiiiiii！！』

半泣きのお子様精霊ズにタツクルされました。  
防波堤にされる気がしないでもない。

## 保護者会（後書き）

大人はいつだって狡く、強いのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5189z/>

---

ヒナゲシの華

2012年1月5日00時48分発行